

『中学教育』特集ひとりひとりを伸ばす授業 一九六六年五月（小学館）

現代が期待する学力

日本生産性本部プログラム教育研究所所長

現代を生きぬくためには、今までのカビくさい学力観を
投げ捨てるべきだ。

一

先日、造船工業会の教育関係者の集まりに出席した際、中学校の教育について重大な批判が出た。それは中学校を卒業して就職したものの成績についての話から発展したものであったが、特に注目すべき発言は、技能者養成の三か年の教育をしていられる先生からのものであった。

「このごろは高校進学者が多くなっているので、就職者をとるのに苦心をするが、それよりも就職者の成績がわるいことが問題である。成績のわるい者がどうしても進学しないことになるのは現代の風潮からしても察せられるけれども、それよりも驚くべきことがある。それは成績表をみると、どの教科も1とか2とかの成績で、採用するのに頭の痛くなるような人たちである。ところが人手不足の折りからどうしても採用をやめるわけにはいかない。そこで採用したからには一人前にするための努力を企業はしなくてはならない。学校はただ卒業

させればよいけれども、企業としてはそうはいかない。
（これは学校にとつてはかなり皮肉なことばである。）

そこで企業としては、特別に指導員を増員して教育をした。教育方法も、できるだけ個別指導を試みた。人によつて指導内容の順序もかえてみた。ところがそうした驚くなかれ、採用の時、最も劣っていると思われたものが最もよい成績をあげている。そればかりでない、りっぱな技能者として自信に満ちて働いている。それ以来自分は中学校の成績評価には信を置かないことにしている。」

このようなことが話のあらましであったが、ここにはいろいろな問題が感ぜられる。まず第一に現在の中学校でやっていることは何であろうか。もしこのような先生の話がわれわれが真剣に受けとるならば、当然右のような問題を感じずにはおれないはずである。それはある小数の中学卒業生の特殊な事例ではないのである。中学校が本当に一人一人の能力を伸ばすように指導をしているのであろうか。企業に入つて、りっぱに能力を発揮することのできる人間を、中学校では劣等生と評価してしまう。企業が採用して教育したからのびたのであるが、もし中学の評価を信用して採用しなかつたら、その人間はどうなつたか。

成績評価というのは、学校のやっている教育に対して、生徒がどれだけの能力を発揮できたかの指標である。いわば能力評価の意味を持つているといつてよいが、それが産業の現場と非常なちがいを示すというのはどういうことであらうか。

われわれは、とかく学力というものを過去の学校教育の伝統から定型的なものとして考えていて、それがどこにも通用する学力だと思つ

ている。しかしそれでよいのだろうか。そういうところにあぐらをかいていると、中学校の成績評価には信を置かないというような事を言われるおそれなしとしないのである。

一一

現代が期待する学力をうんぬんする前に、我々が現在もっている学力観自体を払拭する必要があるのではないか。学力とは本来学習した結果人間が会得した行動力である。そういう本来的な立場からいえば、ある時点である人間がもっている行動力はすべて学力なのである。

しかし教育では、ある行動力を期待して、あるいは目標として教育している。その期待するもの、あるいは目標とするものはある時代のものである。時代時代が必要とする人間像があつて、そこからきまってくるのである。しかし時代の考え方といっても、それはただその時代だけのものではない。本来、時代とは過去から未来への接続点としてあるのであつて、過去を含み、未来をはらんでいる。しかしまた単なる接続点としてある時代があるのでなく、それは一つの時代として、過去とはちがったものである。一つのものとしておさえられるある類型的な存在なのである。その中には過去のさまざまなものが含まれている。未来へ向かつてのさまざまなものはらんでいる。それらが構造をもつてとらえられるときに、時代がとらえられるのである。

時代の教育をとらえることができるのは、以上のような論理においてである。

ところでわれわれは現代というものをどうとらえるのであろうか。現代は現在とは異なる。現在は過渡期であるといわれる。それはおそらく、現代が終わりをつけて、新しい時代を予想するところからいわれているのであろう。その意味では現代ということばは過去へつなが

ったものとして考えられ、新しいものによつて、否定されるものとして置かれてるのであろう。

われわれは現在の時点に立つて、新しい二十一世紀の息吹きを感じ、そこから現代という一つの時代の教育を批判しなければならなくなっているのである。その意味で、この論の主題を考えていく。

さてそう考えると、現代の教育はあまりにも過去によりすぎている。明治以後になつてその体系をととのえて来た教育は、それ自体の論理にしたがつて発展していった。他の文化機能のように教育もまたそれ自体の論理で発展する。それはそれなりに発展なのであるが、それが時代の全体構造の中に位置づかない結果ともなる。そこに改革が必然になる理由があるが、そういう過程をへて、現在は時代と教育とのずれが見えるのである。時代を全体として未来への線で眺めると、新しい次の時代の人間像が見えてくる。そういう人間は、過去から現代への流れにおいてわれわれが持ちつづけてきた、教育の目標となる人間とは相当にちがいがあつたのではないか。

われわれはこれまで強固にもちつづけた教育観を払拭しなければ、新しい時代の新しい人間を期待した教育をうち立てることができないのではないか。

三三

過去の教育の中で育ってきた学力観は、物事がわかるという考え方を基調とした学力観である。それは教育の目的・内容、方法と密接に関連してつくられた学力観である。この学力観を払拭しなければ、いかなることばでその内容を規定しようとも、すべて過去の考え方の中に沈められてしまう。

過去の時代の学力観の基調をなす、物事がわかるという考え方につ

いては説明を必要としよう。これを説明するには、教育の実態を見ることからはじめるほうがよい。われわれが教育とよぶ事實は、過去から現代まで、結局、インフォメーションを与えるということ以上のものを意味しないといったら、いい過ぎであろうか。

もちろんすべての活動がそうだというのではないが、全体として類型的におさえれば、そういう性格をもっているといつてよい。教室の中で「わかったか、おぼえておけ」ということばは最も頻数の多いことばである。そして生徒がわかったといえ、あるいは教師がわかったようだとおぼえれば次に進む。わかることのためのワンラウンドの解説、これが教師の最もエネルギーを注ぐ仕事である。

教師が教育をするということは、いわばわからせることである。教師は教科書を使って教えるが、その教科書は、教師が解説したらわかるようになればよいという態度でつくられている。そしてわかったこととおぼえるのが次の生徒の仕事である。わかったこととおぼえるとは、いったいどういうことなのか。そのことは科学的にはつきり追究されたわけではない。ただ実際問題としては、それを暗記するという事実が必要である。これが生徒の仕事である。

この事実の上で学力観が成立している。生徒の学力とは、わかったこととおぼえておるかどうかということである。それはテストという形にむすびつき、そこで学力がうんぬんされる。そこには過去の時代がつくりあげた、過去の教育観の上に立った学力観が成立している。どのような内容の学力をいおうとも、すべては右にのべたような学力観に消化されてしまう。どのような能力も教師が解決し、わからせればよいものとして考えられてしまう。そしてそれをおぼえるとは記憶することだ、とくにことばとして記憶することだというように考えられてしまう。

そういう考え方をまず基本的に打ちくずさなくてはなるまい。教育とはインフォメーションを与えることではない。生徒が自らの力で積みあげる努力をすることである。それは自覚していなくともよい。しかし結局は生徒が自らを開発するドゥーイングをすることである。もし教師がやることがあるとすれば、そういう場を構成し、生徒がドゥーイングするのを援助することであろう。

そういうドゥーイングは生徒がわかるためではなく、自らできることなのである。教師が解説することがわかるのでなく、教師が考えるとおなじように自分で考えることができるようになるのである。それには教師の手を借りないで考えなくてはならぬ。教師の説明を聞いているのではない。自らものにあたって考えなくてはならぬ。学力とはできる力なのである。自分でものごとが考えられる、やれるということである。

四

右のことをもう少しはつきりするために、いわゆる技能を訓練する教育の場を考えてみよう。機械を操作することができるようになるためには教師の解説をいくら聞いてもだめであって、自らその機械にとりくんで、行動のしかたを身につけなくてはならぬ。身体を動かすのであるが、結局はそれは頭を働かしているのである。その頭の働かし方は自らドゥーイングするのである。

技能の教育は、これまで考えることを教育するのとはちがうかのごとくに考えられていた。おそらく、身体を使うという見かけのちがいに目がくらんでいたからであろう。しかし考えてみるとどこにもちがいはありはしない。機械に対して頭の働かし方を会得するのと、自然や社会の現象に対して頭の働かし方を会得するのとは、本質的なちが

いはないのである。

このような考え方に立つと、学力観もかわってこなくてはならない。学力とはテストではかれるものという考え方はきわめて強いが、そういうものではないということになってこよう。考えることができる。身体を動かすことができるというように、できるということを中心にして学力を考えなければならぬということは、これまでできあがったわれわれの教育観を相当大幅に考え直すということになる。

五

新しい時代、二十一世紀の時代、技術革新の時代といっても特別に考える必要はないと思う。また事実、教育は今のわれわれの生活の中で、技能の中で行なうのである。今われわれのもたないもので教育することはできるはずがない。ただ今われわれのもっているものをどう使うか、そこに問題があるだけである。

新しい時代が期待する人間は、今具体的に考えることができないといったほうが正しい。それは何も今と異なった時代ではないのであるから、今のつづきの時代と考えるべきである。ただこういえることは、つまり今のことが最高にできる状態になっていなければ、次の時代になすべきことができないということである。

学校の教育において現在問題になっていることは、やはりある意味で新しい時代の期待するものである。いかに教育が時代とずれていても、多少は時代の息吹きを感じているのである。それを、学校の教育者ももっと敏感に、しかも、これまで述べてきたような考え方で受けとることである。たとえば道徳教育が問題になっている。道徳的態度とは身についた習性のことである。そういうものを現代の教育はわか

るといふ文脈の中で処理しようとしている。できる人間になっていないのである。国際市場でも、日本人の徳性の低さは軽蔑されている。そういうことではこれからの国際社会で本当に働くことのできる人間とはならないであろう。従来の考え方は、学力の中に道徳的行動力はいれて考えない。そういう考え方は未来への教育を考えることはできないであろう。

国際競争力ということは最近盛んにいわれるが、今後ますます国際交流が盛んになることを予想すると、日本人の能力について、そういう面からの考察をしてみることが必要である。国際競争力の中には人格の力も大きい役割を果たすが、もう一つたいせつなことは、創造的な力だといわれる。これもしかし現代の教育観、学力観で考えた創造力では意味をなさない。わかるという文脈で考える学力は、本来創造とは正反対のものなのである。

創造力とは、できることの上に立つものである。あれもこれもと知っていることでなく、どれを考えるにしても、基本的な筋道を通して考えることができることなのである。しかもスピードが必要なのである。考えるスピード、論理を運ぶスピードが創造力につながるのである。そういう頭脳訓練をすることがたいせつである。

現代が期待する学力は、いずれにしても、できる力であり、訓練された頭脳であり、意志力であり、道徳的行動力であり、いわば基本的な能力である。その点は何もかわってはいない。本物にならないのは、かびのはえた教育者がそれを曲解しているからである。